

機関番号：17401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20500550

研究課題名（和文） 混住化地域における総合型地域スポーツクラブの存立構造と機能

研究課題名（英文） Structure and Function of the Comprehensive Community Sports Club in Urban-Rural Areas

研究代表者

後藤 貴浩（GOTO TAKAHIRO）

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：20289622

研究成果の概要（和文）：

混住化地域における総合型地域スポーツクラブの存立構造と地域社会形成に関する機能を実証的に明らかにすることを目的とした。アンケート調査及びインタビュー調査を用いた地域構造分析並びに総合型の内部構造分析の結果、地域の独自の歴史・時間軸の中で設立・運営されていること、様々な地域スポーツ組織との緊密な関係性の中に存在すること、混住化地域でありながらも町全体に残存する共同体的な行動様式に支えられた存在であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the study is to clarify the structure and function of in Urban-Rural Areas. The regional structure and the internal structure of the comprehensive community sports club were analyzed by using the questionnaire survey and the interview investigation. As a result, the following was clarified. The comprehensive community sports club was established in an original history and the time axis in the region. It existed in an intimate relation to a variety of regional sports organizations. It was the existence supported by a community manner of action that remained in the entire town though it was Urban-Rural Areas.

交付決定額

（金額単位：円）

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2008 年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2009 年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2010 年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |

研究分野：スポーツ社会学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：混住化社会、地域構造分析、生活構造分析、総合型地域スポーツクラブ

## 1. 研究開始当初の背景

総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型とする)は、スポーツを中心とした目的集団であり、一方、地域再生や活性化などの地域社会形成を包摂する多機能的な生活構成集団(内藤、2002)として認知され、その有効性を前提と

して育成が進められている。

戦後、特に 1960 年代以降の地域社会では、ムラ的な包括性の解体と目的集団の優位、さらに、限りなく進む私化の浸透(鈴木、1988)という現象が指摘されている。そのような状況下では、昨今の健康ブームも重なりスポー

ツを中心とした目的集団としての機能は十分に発揮されるものと思われる。しかしながら、地域社会形成という課題に対してはどうか。確かにこれまで地域には、婦人会や青年団、町内会などの多機能的な生活構成集団が存在しその機能を発揮してきた。ところが、これらの集団が衰退していく中で、総合型は、地域社会においてどのような位置を確保し、どのような機能を発揮していくのだろうか。これが本研究の最大の問題関心であった。

研究代表者は、これまでの総合型あるいは地域スポーツに関する先行研究を検討した上で、地域に住み暮らしている人々の生活の実体構造との関係からそれらのあり方について調査・分析を行ってきた。そこでは、具体的に農山村生活者や障害者を対象に、生活者の視点(生活構造分析)から、土着性・公共性の志向が強い者ほど、地域の人とスポーツを行ったり、集団種目を実践したりする傾向にあることなどを明らかにした(後藤、2008)。しかし、全体として、流動化・私化が進む現代社会では、スポーツの行い方も個人化・消費化することや、それには地域格差があることなど興味深いデータを得ることができた。これらの研究を通して、今後、総合型が地域社会形成に寄与するには、地域に存在する生活集団を内包するか、それらと連携し新たなネットワークを構築することが重要であるという仮説を構成することができた。しかし、現実の地域社会の中で、具体的に仮説を検証する作業が残されており、加えて、これまでの研究は、個人レベルの分析(生活構造分析)に偏っており、綿密な地域構造分析を行うことができなかった。特に、地域社会形成というテーマに迫るためには、観念的、現実遊離的なものではなく、現実の地域社会の中で生じ衰退する現象を捉え直し、そこに総合型を位置づけていく作業が必要であると考えた。

また、都市社会学においては、現代社会におけるスポーツは近隣社会とは近い関係にあるとはいえず、スポーツの側から主張されるような地域社会形成への寄与はそれほど大きくないとされており、スポーツの側からこれらの主張にも正面から答えていかなければならないといえる。

そこで本研究では、異なる社会構造にある地域を対象に、綿密な地域分析を通して、地域社会におけるスポーツの位置づけについて検討することとした。具体的には、以下のアプローチからこの問いに迫りたいと考えた。一つは、現実の地域社会における総合型の存立構造を、より実体に即した形で明らかにし、その機能について検討する。そのために、これまで地域社会学で蓄積された研究成果を活用し綿密な地域分析を行うこととし

た。さらに、地域社会形成という局面における総合型の位置づけと機能を明確にするために、地域の生活課題が鮮明となる混住化地域を対象とする事例研究を行うこととした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、混住化地域における総合型の存立構造とその地域社会形成に関する機能を実証的に明らかにし、今後の総合型育成施策のあり方について検討することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 分析の方法

本研究では徳野(2002)の混住化社会研究の分析枠組みを参考にした。徳野は、農村社会学系の村落構造分析と都市社会学系のコミュニティ形成論的分析の接点に位置する形で混住化社会の分析枠組みを提示している。前者は村落解体論的変動論、後者は社会関係・集団の形成力を分析していく手順をとる。したがって、本研究が意図する、地域社会形成という局面における総合型の位置づけ及び機能を明確に描き出すことに有効であると考えられる。特に、混住化社会の地域特質を、新旧両住民の相互作用過程を媒介とした新たな地域社会形成の社会過程として捉える形で分析項目を設定していることから、これからの地域社会における総合型のあり方を探求する上で重要な示唆をもたらすものと考えられる。

具体的な分析手順については以下の通りとした。まず、アンケート調査を用いて対象地域に暮らす住民の生活構造とスポーツ活動の実態を明らかにした。ここでは特に対象地区(4地区：混住A、混住B、団地、農村)別にコミュニティ形成論的アプローチとしての来住者コミュニティ分析が行われ、同時に地域におけるスポーツ活動の位置づけについて検討された。地域社会とスポーツの関係がより明確となるよう、地域構造に鮮明な違いがある地区を比較することとした。具体的には、比較的地域の生活課題が明確化される“複合的混住化”の進んだ2地区(混住A・混住B)、ほぼ旧農家集落で構成され“内からの混住化”が進む地区(農村)、全く新しい土地に形成されたニュータウン(団地)といった異なる地域構造が想定される4つの行政区を分析対象とした。次に、地域のリーダー層に対するインタビュー調査を用いて、村落解体論的アプローチとしての農村集落構造分析を含む地域構造分析を行った。その中で、個別具体的な組織的スポーツ実践のあり様を検討し地域社会構造とスポーツの関係について議論した。さらに、これらの4地区の住民を対象とする総合型地域スポーツクラブ「クラブおおづ」を対象に運営スタッフへ

のインタビュー調査及び会員へのアンケート調査を行い、総合型の内部構造を分析した。最後に、以上の調査結果を踏まえ、混住化地域社会における総合型地域スポーツした。

## (2) 調査の方法

### ① 住民対象アンケート調査

#### 【方法】

混住A：組長を介して、278戸(全戸)に配布・回収した(有効回収率;37.8%、回収数;105)。  
混住B：組長を介して、区費を払っている256戸(全戸数は504戸)に配布し、郵送法にて回収した(有効回収率;35.9%、回収数;92)。  
農村：組長を介して、70戸(宅地6戸を除く)に配布し、住民総会時に回収した(有効回収率;64.3%、回収数;45)。

団地：組長を介して、180戸のうち、自治会に加入している120戸(団地宅地)に配布・回収した(有効回収率;70.0%、回収数;84)。

#### 【調査期間】

2009年1月～5月

#### 【調査項目】

基本的属性、家庭生活、地域生活、スポーツ活動

### ② リーダー対象インタビュー調査

#### 【対象】

区長および地域の事情に詳しい者

#### 【方法】

半構造化インタビュー

#### 【調査期間・時間】

2009年1月～5月

### ③ 総合型内部構造分析

<インタビュー調査(資料収集)>

#### 【対象】

会長、クラブマネージャー

#### 【内容】

クラブの現状、課題、将来展望

#### 【調査期間】

2010年7月

<アンケート調査>

#### 【対象】

20歳以上の会員

#### 【方法】

各サークルのリーダーを通じて配布回収

#### 【配布数・回収率】

配布数：100(65%)

#### 【内容】

基本的属性、家庭生活、地域生活、総合型での活動

#### 【調査期間】

2010年7月～8月

## 4. 研究成果

### (1) 対象地区の概要

#### ① 大津町の概要

大津町は、熊本市の東方約19kmに位置し、古くから肥後(熊本県)と豊後(大分県)を結

ぶ豊後街道(現国道57号線)の要衝であったと同時に、阿蘇外輪西部に連なる広大な森林、緩やかな傾斜をなして広がる北部畑地帯、阿蘇山を源とする白川の豊富な水資源を生かした南部平野の水田地帯を有する農林業の盛んな地域でもあった。現在はJR豊肥本線が町中心部を東西に横断し、国道57号と国道325号が縦・横断すると共に、熊本空港、九州縦貫自動車熊本ICに近接する交通条件に恵まれ県下でも有数の工業集積地域となっている。町全体が混住化社会を形成してきた大津町では大幅に人口・世帯数が増加(1975年：18,086人・4,642世帯、1995年：26,376人・8,187世帯、2010年：30,973人・11,430世帯)している。年齢構成では、年少人口5,035人・生産人口19,784人・老年人口5,901人となっており高齢化率は19.2%と熊本県内では2番目に低い。

#### ② 各地区の概要

##### 【混住A】

世帯数は278世帯、人口605人、高齢化率22.8%となっている。住宅構成の概況は、旧農家集落、新道沿いの宅地(主に雑穀商や金物屋など)、築30年程度の一戸建て団地、近年造成された一戸建て団地、近年建設されたマンション等で構成されている。旧農家集落は34世帯で、専業農家は3世帯である。専業農家のうち1世帯は後継者のいる大規模畜産農家であり、2世帯は後継者はおらず、農業収入のほかにもアパート等の家賃収入がある。山沿いにあるため2反3反の畑中心の比較的貧しい農家集落であった。天神祭などの伝統的行事は旧農家集落で存続している。

##### 【混住B】

世帯数は504世帯(実際に区費を払っている世帯は256世帯)、人口1433人、高齢化率8.4%となっている。アパートの住人の区費については、アパートのオーナー(旧農家集落住民)が代表して払っており、行政の配布物などは配布される。住宅構成の概況は、旧農家集落の周囲に一戸建て団地とアパートが立ち並んでいる。大型の宅地開発ではなく、地主(旧農家集落住民)が農地を転用し不動産会社に売却する形で開発が進んだ。平地であったことと町の中心部に近いこと、さらに高校、中学、小学校、病院等が区内にあるということから急速に宅地化が進んだ。旧農家集落は、平地の農地と白川の豊富な水があり比較的裕福な農家集落であった。しかし、農業収益と比べて、土地売買による収益やアパート経営による収益の方が多いため、兼業化・非農家が進んだ。38戸あった農家が、現在では専業農家3戸、兼業農家10戸となっている。地域には旧農家集落住民と子供会が連携して行っている伝統行事(モグラ打ち、子ども相撲など)があり、来住者との交流を図っている。

### 【団地】

世帯数は180世帯、人口487人、高齢化率6.8%となっている。住宅構成の概況は、大型一戸建て団地とアパート(20戸程度)で構成される。30年ほど前に宅地開発が行われ、残りの区画は1~2区程度。アパートの世帯は自治会には入っておらず、交流はほとんどない。開発当初から入居した住民を中心に開始された「ふれあいサンデー」という祭りを自治会で継続して開催している。団地の自治会所有の集会場を建設し、交流の場としている。

### 【農村】

世帯数は76世帯、人口240人、高齢化率35.8%となっている。住宅構成の概況は、旧農家集落と6戸の宅地で構成される。旧農家集落は専業農家6戸、兼業農家34戸となっている。集落営農には専業・兼業計40戸が参加し、後継者のいる農家は1戸のみとなっている。1か月に1回、地区の役員会を開催し、行事や役の相談、予算について話し合っている。役員会は、上、中、下の組に関係なく選出される区長、区長代理、会計に、各組3名及び宅地から1名の評議員を加え構成される。地蔵祭り、子ども相撲大会などの伝統行事や新たな地区の祭りであるホテル祭りも旧農家集落の住民が主体的に運営している。また、宮座などの集落の役も存続している。

### (2) 生活構造とスポーツ活動

全ての地区で「スポーツ大会」を地域行事と認識している者が一定程度存在しており、また地域集団では全ての地区で同じような割合でスポーツ集団に所属している者が存在していた。その中で、地域行事への無関心層の多い混住Aは「スポーツ大会」を地域行事として捉える者が最も多く、定期的スポーツ実践者の多い、いわば“スポーツの盛んな地区”といえる。しかし、スプロール的に混住化が進んだため地区全体の統一感や連帯感は乏しくスポーツ活動そのものは、自立した個人の生活拡充のための活動として浸透している。同じく混住化地域である混住Bでは、近隣関係が減退し、健康志向を中心とした個人的あるいは家族内のスポーツが実践されており、旧農家集落と新興住宅の住民をつなぐ地域行事(地蔵祭り、モグラ打ち、宮相撲)が存在するなかでは、スポーツ行事そのものは地域行事としての認識は薄い。一方、生活構造の現代的影響を受けつつも古くからの共同体的関係を引き継ぐ農村や宅地開拓当初からの入居者をリーダーとし積極的な地域づくりに取り組んできた団地では、地域の祭り(ふれあいサンデー、ホテル祭り)や共有財産(集会場、山林)を有しており、スポーツそのものは地域社会においてそれほど重要な位置を占めていない。

### (3) 地域構造とスポーツ

区の代表者へのインタビュー調査を分析した結果、それぞれの区で展開されるスポーツ活動は当該地域の社会構造の影響を受けることで、それぞれ異なる社会的位置づけと機能を有していることが分かった。

まず、地区としての一体感に乏しい混住化地区では、区の人びとの紐帯となるべきものがないため、スポーツが地域生活において比較的重要な位置を占めているということである。スポーツ活動の社会的位置が前景化されているといえるであろう。つまり、関係性が乏しく相互認識の低い混住地区では、スポーツ活動は個別の地域的な活動にとどまり、個々の活動の総体としては前景化され、量的拡大という側面では評価されるものの、それらが単独で地域社会形成という側面に何らかの役割を果たす可能性は低いと言わざるを得ない。

一方で、団地のソフトボールチームについてみていくと、日常的な活動レベルでは地域との関係性が希薄であったが、地区のリーダーやそれを支える人びとの多くがソフトボールチームに関わっている事実が確認された。このリーダーらが団地の共有財産としての集会場建設を推進し、チームの懇談の場として活用している。また、農村では自治会によるグランドゴルフ場に関連する環境づくりが行われてきたが、これら一連の取り組みはいわゆるスポーツ集団の親交的コミュニティから自治的コミュニティへの発展過程として捉えられるものではなく、地域の自治機能に支えられた取り組みと捉えられるであった。それだけでなく、他の地域集団(婦人会)などの地域組織活動が衰退していく中で、地域における自治会の役割も限定されてきている状況に置いて、集落の関係性の中で維持されてきた自治会の機能を再び引き出すきっかけとなり得ているのではないかと考えられる。さらに、農村では混住Bと同じように、子ども相撲を毎年開催している。旧農家集落にはほとんど子どものいない状態はどちらも同じであるが、混住Bでは新興住宅の子ども会の行事として行われ(農家集落と新興住宅の交流の意味も多少ある)、一方農村では、他出子の子どもや孫がその中心となっている(農村の他出子の多くは同じ大津町の市街地に居住する)。毎年顔ぶれが代わる子ども会のイベント的行事として様変わりした形で存続し、宅地の子どもの数の増加とともに盛大になった子ども相撲は混住Bという地域においては比較的前景化されているといえるであろう。それに比べ、ムラの行事として血縁・地縁を頼りにそれなりに維持されてきた農村の子ども相撲は地域のなかで後景化しつつある。しかし、家族を中心と

した安定かつ相互認識の強い関係性で維持されている農村の子ども相撲には、何らかの意図的な機能(混住 B における新旧住民の交流行事など)が託されているのではなく、存続すること自体に家を中心とする集落の関係性の確認作業ともいえるべき意味があるのではないかと思われる。

#### (4) 考察 ～総合型の存立構造と機能～

現代社会において拡散しつつけるスポーツはどのような地域社会(農村や団地、混住化地域)にも等しく浸透していく。そして、スポーツの持つ汎用的な(“いつでも誰でもどこでも”)という言説に代表されるような機能が一見地域社会内の関係性構築に有効な手段として捉えられるが、それは自立した個人を前提とするネットワークの構築であり、同好の集団内で止まることも、あるいは地域を超えて広く拡散していくこともある。

しかし今回の事例から、スポーツに限られた地域の中で社会形成的な役割を担う可能性があるのは、その地域が明確な物理的・空間的な範域を有し、そこに住む人びとの相互認識が可能な状態にある場合ではないかということが指摘された。混住化地域のようにスプロール的に土地開発が行われ関係性の薄いところでは、一部の関係のある人々を“顔見知り”にし“交流”することは可能であろう。しかし、このようなスポーツをする人が増えることと地域社会における関係性が積み上げられることは決して短絡的に結び付けられないということである。同じようなスポーツ活動であってもその置かれた地域社会の構造的・関係的なあり様によって異なる社会的位置に位置づけられるということである。

以上のような知見を得たうえで、改めて混住化地域における総合型地域スポーツクラブの存立構造と機能について検討してみる。まず、大津町に設立されている「クラブおおづ」について、会員へのアンケート調査および会長等へのインタビュー調査から明らかになった点を確認しておく。

総合型の目的・理念の理解はある程度認められるが、会員にとって総合型の活動はあくまでも自己目的的な活動として行われていると捉えられた。つまり、現段階では「クラブおおづ」と地域社会の具体的関係性は乏しく、そのことが自己目的的な会員の高い満足感を示す一方で、「会費のあり方への要望・不満」となって現れている。また、コミュニティ・モラルを用いて、一般住民および会員間での比較を行ったが大きな差は認められなかった。その理由として考えられるのは、大津町自体が混住化しているとはいえ比較的土着的傾向が強く、人びとの日常的な関係性が維持・存続している状況にあり、結果的に

総合型の会員も全体としてその傾向を示すことになり、内部間での差異として現れなかったものと考えられる。

しかしながら、インタビュー調査を通して「クラブおおづ」は、そもそも単なるスポーツ組織(スポーツを目的とした目的集団)としてだけでなく、地域組織との連携のなかで、かつ様々な土着的地域組織活動との連携の中で設立された経緯が確認された。このことを踏まえると、混住化地域を形成してきた大津町における「クラブおおづ」の存在を次のように捉えることができる。第一に、クラブが地域の独自の歴史的・時間的軸の中で設立・運営されていること、第二に様々な地域スポーツ組織との緊密な関係性の中で存在すること、第三に混住化地域でありながらも町全体に残存する共同体的な行動様式に支えられた存在であるということである。したがって、今回は混住化地域における「クラブおおづ」の明確な機能を示すことができなかったが、クラブの存在そのものが地域社会に支えられ、かつ、地域社会における人びとや組織間の関係性を支えていく可能性が示されたといえるであろう。

橋本(1985)は、テニエスのゲマインシャフトとゲゼルシャフトに触れて、ゲゼルシャフトが、実は同等性としてのゲマインシャフトを前提にしていることを指摘している。そして、「ゲゼルシャフトを止揚する試みは、『あらゆる結合にもかかわらず分離している』社会関係に、今一度、結合の、共同の社会関係を加乗(super-imposition)することによって可能になるであろう」と述べている。今回の事例とつき合わせていくとまさしく共同性の媒介項となりうる中間集団としての総合型地域スポーツクラブを想起することができるのではなかろうか。さらに、石田(1985)は、現象的には集落の共同・自治機能の低下は事実であるけども、それが本質的なものかどうかの判断は微妙であるとしている。人口学的な都市化がある程度進み、他方で集落農民の個人主義的な「思考と行動」がある程度進んでも、集落の共同・自治機能がそれなりによく維持されているのは、現実としてそこに「土地」と「家」があり、農業が維持されているからであると指摘している。混住化が進展する大津町でも共同体的関係が維持(団地では再生産)されているのはまさしく「土地」と「家」の存在によるものであった。総合型地域スポーツクラブが今後さらに地域社会において前述のような機能を果たしていくためには、地域の「土地」や「家」とどのように向き合うことができるかが大きな鍵になっているといえる。

#### 参考文献

後藤貴浩(2008) 農山村の生活構造と総合

型地域スポーツクラブ:生活のあり様とスポーツ実践の関係性に着目して. 体育学研究, 53(2): 375-389.

橋本和幸(1985) 新しいコミュニティの形成. 二宮哲雄ほか編 『混住化社会とコミュニティ』. 御茶の水書房: 23-60.

石田正昭(1986) 農村の都市化・混住化と集落機能の変化. 三重大学農学部学術報告, 73: 81-98.

内藤辰美(2002) 社会変動と地域社会形成. 鈴木広監修 シリーズ 社会学の現在 2 『地域社会学の現在』. ミネルヴァ書房.

鈴木広(1986) 『都市化の研究』. 恒星社厚生閣: 434-464.

徳野貞雄(2002) 現代農山村の内部構造と混住化社会. 鈴木広監修 シリーズ社会学の現在 2 『地域社会学の現在』. ミネルヴァ書房: 231-237.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 「地域社会分析から捉えるスポーツ活動」, 後藤貴浩, 『熊本大学教育学部紀要 人文科学』, 59号, 239~249頁, 2010, 査読無.
- ② 「スポーツライフの差異に関する研究ーライフヒストリー分析を通してー」, 後藤貴浩, 『研究論文集ー教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集ー』, 第4巻1号(リポジトリ論文), 2010, 査読有.
- ③ 「生活者としての障害者とスポーツ」, 後藤貴浩, 『スポーツ社会学研究』, 第18巻2号, 67~78頁, 2010, 査読有.
- ④ 「縮小論的地域社会理論の可能性を求めて」, 徳野貞雄, 『日本都市社会学会年報』, 第28号, 27~38頁, 2010, 査読有.
- ⑤ 「総合型地域スポーツクラブにおけるリーダーの社会関係資本に関する研究」, 後藤貴浩, 『熊本大学教育学部紀要 人文科学』, 58号, 41~50頁, 2009, 査読無.
- ⑥ 「農山村の生活構造と総合型地域スポーツクラブ:生活のあり様とスポーツ実践の関係性に着目して」, 後藤貴浩, 『体育学研究』, 53巻2号, 375~389頁, 2008, 査読有.
- ⑦ 「公共スポーツ施設における指定管理者制度の社会的意味」, 後藤貴浩, 『熊本大学教育学部紀要 人文科学』, 57号, 219~228頁, 2008, 査読無.

[学会発表] (計4件)

- ① 「地域社会分析から捉える住民のスポーツ活動(2)ー地域代表者の語りを通し

てー」, 後藤貴浩, 日本スポーツ社会学会第20回大会, 2011年3月22日, 成蹊大学(東京都).

② 「スポーツと地域社会形成」, 後藤貴浩, 西日本社会学会第68回大会, 2010年5月23日, 福岡県立大学(福岡県).

③ 「地域社会分析から捉える住民のスポーツ活動」, 後藤貴浩, 日本スポーツ社会学会第19回大会, 2010年3月29日, 岩手大学(岩手県).

④ 「公共スポーツ施設における指定管理者制度の意味」, 後藤貴浩, 『スポーツ社日本スポーツ社会学会第19回大会, 2009年3月24日, 関西大学(大阪府).

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

後藤 貴浩 (GOTO TAKAHIRO)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号: 20289622

##### (2) 研究分担者

徳野 貞雄 (TOKUNO SADA0)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号: 40197877